

労協連だより

1号休ませてもらい、新年の挨拶をしないままに早2ヶ月が過ぎようとしています。今年こそは、協同労働の協同組合が法的にも社会的にもしっかり位置づく1年に、と心新たにしています。また、その決意が励まされるような年明けの1ヶ月でした。

この原稿を書き綴っている時に、予期せぬ訃報が舞い込みました。ご存知の方も多いかと思いますが、粕屋郡高齢者福祉業団の理事長で、労協連の理事などを歴任された、筋金入りの全日自労幹部の竹森幸男さんが、2/9未明他界されました。ちょうど1年前に、急性骨髄性白血病が発症し、余命数ヶ月と宣せられて以降、持ち前の馬力と明るさで乗り切っただけで、労協新聞に毎号「病床人間大学」という闘病記を書き綴っておられました。労協運動が大きな転換を遂げてきたこの数年間、全日自労から生まれた事業団が、労協へ、という道筋を患直に私欲なく取り組まれた竹森さん。闘病記を「百歳。百姓。現役。～土からもらった命、ガンとの闘い。」という本にまとめられていました。最近では飲んだ席でようやく名前も覚えてもらい、「おまえみたいなつまらんやつに・・・」と張り合っただけで語りかけられた顔や声、1995年の雲仙総会の打ち上げの夜、永戸さんと大笑いしながら、模擬甲辞を即興で披露し合っていた情景が脳裏を駆け巡ります。最近の全国総会では、決まってトリの発言は竹森さんでした。時間厳守でメリハリが利いた笑いがあふれる発言。そして内容がびんびん伝わってくる、物事の本質をついた発言にいつも感服させられていました。な

古村伸宏（日本労協連・事務局長）
んでも自分が率先してやらないとすまないタイプで、農業もやり議員もやり労協運動もやる、まさに現場の実践が身にしみた指導者でした。昨日2/11に葬儀に参列し、集まる人の多さに驚きながら、これほど涙が止まらなかった葬儀は久しぶりでした。死してなお、泣いてなお、未来を感じさせる人、竹森さんのご冥福をお祈りします。また天国で、せつせと働いていることでしょう。

そんな竹森さんも、今の自治体の激しい変化を議員として見つめていたことでしょう。年明け早々、千葉・青森などを回りながら、仕事おこしやその講座を行政に働きかけ、予期せぬ新しい可能性も芽生えています。やはり、「地域に必要な仕事を起こす」労協が、実績を伴って自治体の期待と注目を集める時代を感じます。詳しい成果はもう少し具体化できたときに報告しますが、とりわけ若者の仕事おこしという分野へと、いよいよ実践は踏み出しました。厚生労働省が言うような「コミュニティ・ビジネス」の分野を、具体的に仕事として創造する挑戦です。これまでの常識を超えて、若者が社会の当事者・主体者になる運動を、もう一度若者とまみれ実現したいと決意しています。その格好の舞台が大学という場所です。「仕事おこしの時代」をより鮮明にする「政策づくり」に労協連も取り組むことになりました。今度の総会はその実践の幕開けです。有形無形の志と、先人たちの夢を背負って、気負い込んだ1年にしたいと思います。

時代は待ってくれませんかから、心して。是非お力添えをよろしくお願いします。